連載
市長室からこんにちは
vol.86

益田市長
山本 浩章

　囲碁の起源をたどると、発祥地はおそらく中国、成立の時期は不明とされるものの、とてつもなく長い歴史を持つことは確かです。黒と白の石を交互に置く19×19目の碁盤は、気の遠くなるような局面の変化をはらんでおり、あたかも小宇宙がそこにあるかのようです。

　囲碁に関連する言葉や故事も数えきれないほど存在します。例えば「捨て石」「一目置く」「白黒つける」、さらには「死活問題」や「八百長」なども囲碁に由来するとされています。三国志には、関羽が腕に受けた矢の毒を骨から削り取るという荒療治を受ける際、常人なら気絶するほどの激痛があったにもかかわらず、囲碁を打ちつつ平然と凌いだという豪傑ぶりが描かれています。また、我が国では幕末薩摩の下級藩士だった若き日の大久保利通が、囲碁を通して権力者島津久光に近づき、それを契機に才腕をいかんなく発揮して、ついに維新の大業を成し遂げたという話も有名です。

　日本に過去幾多の名人が現れましたが、中でも本因坊道策（江戸前期、現在の大田市仁摩町馬路出身）や本因坊秀策（江戸後期、尾道市因島出身）はその圧倒的強さから「碁聖」と呼ばれます。しかし、視野を世界に広げたとき、別格の大功労者といえるのが益田市高津出身の本因坊薫和こと岩本薫です。「原爆下の対局」でも名高い第３期本因坊戦を制して棋界の頂点を極めただけでなく、それまでほぼ東アジアだけの嗜みであった囲碁を世界的競技とするため、私費を投じてヨーロッパや北米、南米に次々と拠点を築いたからです。

　平成11年11月29日に97歳で亡くなった岩本薫に対し、益田市はその後名誉市民の称号を贈りました。また、市制施行60周年となる平成24年には大田市、尾道市など全国の囲碁ゆかりの市町の代表を招いて囲碁サミットを開催しました。

　没後20年を迎えるこの秋、日本棋院益田支部では高津公民館の一角に顕彰碑を建立されます。そこに刻まれる本因坊薫和本人の筆跡による「囲碁を世界に」のペン文字は、その情熱をもっとも強く注いだ事績を端的に表す6字といえます。

中世益田講座「益田氏と須佐」（全２回）

第１回　港町須佐と益田氏

【問い合わせ先】市文化財課　☎31-0623

　萩市須佐歴史民俗資料館では、9月7日(土)から11月24日(日)まで、企画展「旦那様がやってきた～益田から須佐へ近世益田家の幕明け～」が開催されています。「旦那様」とは益田氏のことで、須佐では江戸時代の領主として親しまれています。本連載では、益田氏と須佐の関係を紹介します。

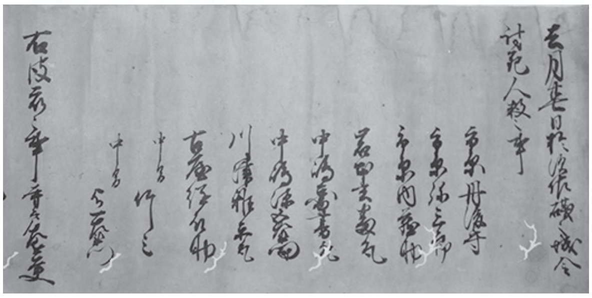
　益田氏と須佐の関わりが古文書に表れるのは、周防・長門（山口県）の大名大内氏の滅亡直前のことです。弘治２（１５５６）年頃、大内氏最後の当主義長とその重臣内藤隆世が益田藤兼に宛てて、須佐郷・多万郷（田万川）と小川郷のうち鍋山を預けています。大内氏は毛利氏や吉見氏の侵攻を受け、滅亡の危機にありました。さらに益田氏まで離反しては困るということで、益田氏が希望したこれらの地を預けたようです。

　結局、大内氏は滅亡し、益田氏は長門国阿武郡（山口県北部）の沿岸部を支配下におさめました。

　阿武郡沿岸には日本海交易を進める上で重要な港が多くありました。この頃、平戸（長崎県平戸市）の大名松浦隆信は、益田氏の有力な一族益田兼貫に宛てて、交易上の協力関係の締結の申し入れを快諾し、須佐や江崎に船を送った際には便宜をはかってほしいと依頼しています。須佐が重要な港だという認識が九州の大名にもあったことがわかります。

　このように重要な須佐ですが、永禄５（１５６２）年に、益田氏が毛利氏の援軍として尼子氏方の三隅氏の板井川城（美都町板井川）を攻略した隙に、吉見氏によって落とされてしまいます。

　こうして益田氏と須佐の関係はいったん途切れてしまいますが、益田氏と須佐は江戸時代以前から関わりがありました。



吉見氏に須佐を落とされた際に戦死した人々の名前が記されている益田藤兼感状（部分。山口県文書館寄託「益田高友家文書」）